

第6回沼津市リノベーションまちづくり戦略会議 議事録

日時 : 平成29年1月24日(火) 18時~21時

会場 : ポルト沼津 地下1階(大手町2丁目1-1)

出席委員 : 嶋田委員、江口委員、岩崎委員、今井委員、山田委員、大木委員、杉浦委員、小松委員、一杉委員、遠藤委員、植松委員(市職員)

テーマ : 沼津市リノベーションまちづくり戦略の策定に向けて

I. 沼津市リノベーションまちづくり戦略の説明(嶋田委員他)

嶋田委員 : この戦略作りは、今までの行政が作るトップダウンの計画ではなく、開かれた場で議論された、みなさんが作ってみなさんが実行する計画。これまで5回にわたり、5つのテーマで話し合ってきた。

第1回 : 不動産オーナーと家守が一緒に行うリノベーションまちづくり

第2回 : 沼津の資源と新しい仕事

第3回 : 沼津の不動産オーナーの役割

第4回 : 沼津の遊休資産と新しいコンテンツ

第5回 : 沼津の新しい暮らし

これから私(嶋田)が戦略の案について話をするので、自分がこう行動するから戦略をこう変えてほしいというような責任ある発言をお願いしたい。また、前回の会議で遠藤謙さんにもご発言いただき、スポーツはまちづくりの重要な要素だと感じたので、本日は遠藤さんをゲストにお招きした。あとで話をさせていただく。

嶋田委員から戦略案をパワーポイントで説明し、途中登壇委員に意見を求めた。

1 沼津の現状

嶋田委員 : 沼津市の本質的な都市経営課題は、製造業を中心とした質の高い雇用を喪失したことにより、財政状況が悪化し始めていること。また、まち中に空き地、空き家が増加し、高齢化が進んでいること。

2 沼津の未来

大木委員・岩崎委員・今井委員 : 朗読 :

嶋田委員 : 今の朗読は、将来の沼津のイメージ。今日の参加者は具体的なイメージを持って来てくれていると思うが、他にもいろいろあると思う。スポーツであるとか、近所でとれた野菜を売る店がたくさんできているとか、いろんなパターンがあっている。例えば、高校生が進学せずに沼津のまちなかで自分にあった仕事をする、という極端な未来像があってもいい。

市内に1万戸以上あると考えられる無断熱の空き家全てを、高気密高断熱の住宅にリノベーションすると年間350億円のキャッシュアウトが生じるという話も面白いと思う。

高架のための空き地、使われていない市営住宅についても戦略に書きたい。

私はコンセプトは「100% U-TURN CITY」がよいと思っている。

沼津の人は地元愛が強い。一回外に出て沼津の良さに気づくのでは？

市外に出た人が様々なスキルを持って戻ってくる、または地理的に恵まれている

ため、戻ってこなくても沼津に活躍の場があるということを伝えたい。

3 リノベーションまちづくりとは

3-1 リノベーションまちづくりって？

嶋田委員：民間ビジネスの伝播力はとても強いので、1つのリノベーション物件ができると必ず同じような物件が生まれ、エリアを変えていくこととなる。

3-2 どんなことをどうやってやるの？

(1) はたらく場をつくる

杉浦委員：市街地の空きビルや空き店舗など比較的大きな物件を利用し、子育てママのネットワークを利用し、ママたちの手作り雑貨のショップなどを作りたい。

小松委員：沼津野菜をブランディングし、生産者とつながるまちにしたい。

嶋田委員：まちなかで質の高い飲食が集まり、生産者、供給者、消費者の皆が楽しい場になれば。

山田委員：空き家を借り、改修している。駅南に駐車場があれば何でもできる気がする。公共施設の駐車場をちょっとだけ貸してほしい。

嶋田委員：車で来やすく、まちなかを歩きやすいまちができないか。歩く人が多いまちは健康寿命が長いらしい。健康・スポーツとまちづくりは密接に関わっている。

(2) 暮らしの場をつくる

植松委員：首都圏の方が二拠点居住先として甲信越・岐阜などを選んでいるが、沼津も適しているのではないか。

一杉委員：資源をうまく使い倒し、そこに価値を見出す場をつくる。そうしたことを通じた暮らしを提案するためにリビルディングセンターを作りたい。

(3) 遊び場をつくる

嶋田委員：利用頻度の低い別荘を使ったツーリズム、ステイケーションの可能性のあるのではないか。

岩崎委員：実家の三浦周辺にある空き家を使って、週末別荘など、東京ではできない体験を提供すれば、U-TURNのきっかけになるのでは。家を使って構わないと言ってくれる友人もいる。

今井委員：内浦に空き家が増えている気がする。まず自分の店を宿屋として機能させたい。内浦でこの辺りに住みたいと言ったら自治会長が日当たりのよい、いい物件を4-5軒紹介してくれたこともあった。まちやど・アグリツーリズムの可能性のある地域だ。

嶋田委員：スポーツについては後程。

3-3 誰がやるの？

嶋田委員：リノベーションスクールを待たなくていい。この会議でつながった人たちが空き物件を使ってどんどん事業を起こしていくのがよい。

3-4 民間(金融機関等)の支援

嶋田委員：補助金に代わる資金の支援を行うため、金融機関が融資しやすいよう、公的融資の創設や相談体制の整備が必要である。

3-5 行政(沼津市)の支援

嶋田委員：戦略会議は今年度で終わるが、多様な関係者がフラットに集まれる場を継続し、I・J・U-TURN CITYの実現を目指してほしい。

4 スケジュール

嶋田委員：5年間はスクールを開催するというスケジュール。家守はスクールにかかわらずこの5年間でどんどんビジネスを生み出していったらどうか。

今日の説明はたたき台で、今までの会議での発言を繋いだものなので、あとで自分の考え、自分がやってみたいことはどんどん発表してほしい。

植松委員：戦略については今後、今日の議論をもとに、参加者が友達を誘いやすいような形に修正して、市の計画として位置づけていく。

II. オリンピック・パラリンピック・スポーツによるまちづくりについての提案(遠藤委員)

世の中に障がい者はいない、テクノロジーに問題があるだけだと考えている。

川崎市は「かわさきパラムーブメント」をメインコンセプトに掲げ、パラリオンピックの事前キャンプ等を進めている。

スポーツを使ったまちづくりの事例として、一点突破型で、土地の強みを活かして人を集めている。

スポーツは医療費削減にも繋がる。スポーツを通して健康になるようなアクティビティを。土日を潰して情熱のない先生に習ってまで部活としてスポーツをやることに疑問がある。地域でコーチを雇うなど、先生というボランティアに頼る以外にも方法はあるのではないか。

中学校・高校がたくさんあるのに、今日のような場に中高生がいないのはもったいない。戦略会議も最初から参加していない人には入りにくくなってしまっている。中高生が自分で行動を起こせるような環境を整えてほしい。

【質問等】

杉浦委員：優秀な指導者に見合うフィールドがない、中高生がちゃんとした指導が受けられないケースがあるのでは。

江口委員：今一緒に仕事をしてみたい人は？

遠藤委員：パラリンピックはリハビリの延長がスポーツに昇華した。医療側の人からスポーツにこない。医療行為の延長としてのスポーツがあると考えているので、そういう方にお会いしたい。

植松委員：テクノロジーの進歩によって、骨折した子どもが翌日から登校できるとか、70歳を過ぎて100mで10秒を目指すとか、遠藤さんの仕事を通じて描いている未来はあるか。

遠藤委員：メガネなど身体機能を補完する技術はどんどん生まれている。今技術的に難しいのは身体に近い技術。体はどんどんサイボーグ化していく。自分はそういう技術を生み出したい。

嶋田委員：高齢者が若者と同じような生活を送ることができるという未来がくる場合、どんな仕事が生まれるのだろうかと話聞きながら考えた。

一杉委員：自分が思う沼津のよさは、いろんな要素があって多様性があり、それを育むまちであること。沼津の環境を活かし、いろんなスポーツを経験することで一流選手が育つこともあるのでは。気候とか設備とかトップアスリートや研究者が求める環境はあるんですか？

遠藤委員：使える競技場が欲しいというのはある。我々にとって沼津のロケーションはエンジニアと選手が交わる場として非常に魅力的。

嶋田委員：沼津市民が最初に踏み出すべき一歩として、使いやすい練習場があったら、というの

はあるか？

遠藤委員：義足ランナーは点在している。愛鷹のような普通の陸上競技場にある設備があれば十分。沼津のロケーションは彼らが集まるのに丁度いい。日本には室内競技場はない。帯広のスケートのトレーニングセンターは普段地域の人がスケートできる。いろんな学校の生徒が来ていて交流もできる。

嶋田委員：岩手県紫波町のオガールベースも普段は子どもたちが練習している。一流選手と同じ環境が教育的にも良い効果を生んでいる。

小松委員：遠藤さんに会ったとき、沼津は障害があるまちだと感じた。いいコンテンツがたくさんあるのにうまくいかない現実がある。

パラリンピックに出るようなアスリートはアウトドアに興味があったりするのかな？

遠藤委員：健常者と同じように興味を持っている。

小松委員：川でカヤックとか、沼津はもっと人生を楽しむフィールドになれるのではと感じた。

Ⅲ 会場全体から今日の感想や意見

江口委員：まず、よく構想をまとめたと思う。これが形になればいいと思うが、どうしてもありきたりな表現になりがち。数年後のまちの姿、一人一人のストーリーが入っているのがすごく良いと思う。身の回りの小さなビジネスを起こしていくのがリノベーションまちづくり。身の回りの小さな課題を自分の言葉で語ることが大事。

まちに開くというキーワードをもっと打ち出しては？リノベーションまちづくりは実験。既成概念にとらわれずに、どんどん実験すればいい。ルールとしてまちに開いて、いろんな人と関わるのが既成概念を壊すことになる。

中高生は大事。高校に行って説明できるレベルの内容にすることを目標に修正してほしい。

遠藤委員：現役世代が若い世代に伝えることは大事。以前沼津で開催された為末大の講演会で、開催時間が平日の昼過ぎだったためか、高齢者しか聴講していなかった。高校生のときに現役で活動している方から刺激を感じることができたら良いのでは？

女性：先日のワークショップで、公共空間を活かしてまちにいる人たちが持つ知識や技術を伝える場「狩野川大学」を提案した。分断された世代間の繋がりとか、まちに出かける理由とか、いろんな要素が詰まっていたワクワクした。

リノベーションスクールで「踊る商店街」を提案し、みんなで考えている。踊るだけでは行き詰ってしまう。実現したいのは多様性を生む場所。まだ0.2くらいしか進んでいないが形にしていきたいと頑張っている。

男性：中高生の起業家育成について、自分も昨年くらいから考えていた。中高生の起業家育成をしたい人には、学歴社会を少しずつ崩していくことを考えてもらいたい。機械系のエンジニアなので分野は変わるが、会社を辞め、東京プログラミングスクールに通い、プログラマーとして、リモートワークで家にいながら仕事をしようと思っている。リモートワーカーの沼津でのモデルになれば、IT系のリモートワークを行う際に相談窓口があれば教えてほしい。

小松委員：中高生にかっこいい大人の姿を見せる。「まちづくり」ではピンとこなくても、沼津で豊かな暮らしができる印象づければ、進学で他の地域に行っても就職の際に思い出すのではないかな。

一杉委員：地域情報メディアをつくり、沼津で活躍する方を紹介したい。中学生、高校生、まち

のために何かやりたい人はみんな紹介できたら良い。東京でも静岡コミュニティのよ
うなものがある。

嶋田委員：鳥取では大学が少ないので進学で外に出ってしまうが、カッコいい大人がいることを中
高生時代にインプットされているので、30代くらいで戻ってくる。

高校生が使う SNS (Twitter、LINE) で憧れのロールモデルの情報を流すべき。

植松委員：地域情報メディアを2月頃立ち上げる予定。皆様にも取材させていただきたい。

女 性：転勤族で沼津に越してきたが、友達を見つけるのに苦労している。子どもがいな
いのでママ友もできない。コミュニティツールがあれば、どこに行けば友達づくりがで
きるか調べられる。

女 性：オーストラリア出身。4年前から沼津に住み始めて、友達がなくて寂しかった。友
達が作れるコミュニティを待っていたが、情報交換の場、楽しく過ごすための場を自
分で作ってみた。毎週水曜日に15~30人が集まっている。日本の文化は新しいコミ
ュニティに入りづらい。入りやすいものがあれば助かると思う。これから自分の会社
を作れたらと思う。自営業をしたい外国人に対し、英語でアドバイスがほしい。

女 性：国際交流が幼い時から身近にあった。海外の文化に触れて日本の文化を改めて知った。
リノベーションスクールの案件で、多文化交流もやりたい。同時に、沼津の情報が日
本語でしかないため、沼津のいいところを英語で紹介する web サイトを作っている。

一杉委員：まちのポータルサイトとして人情報、不動産情報、求人情報などをまとめていきたい。
英語で発信できれば外から来た人も入りやすくなる。

大木委員：今、沼津ジャーナルと連携して、コンテンツの一つとして人を紹介するメディアを作
っている。英語にも対応できれば。

小松委員：沼津ジャーナルでは試験的な英訳は行っているが、継続的に続けるためには、ビジネ
スとして成り立たせる必要がある。

嶋田委員：遠藤さんに質問で、沼津には、義足をつくるなど、新しいものづくりの産業が集積し
ているようなイメージはあるか。

遠藤委員：沼津高専があるので卒業生に期待できると思う。

嶋田委員：沼津の産業は工作機械を作るような技術で、それが衰退して雇用が失われたのでは。
これまでのものづくりの産業に代わる新しい高付加価値のものづくりが産業になれ
ば。

遠藤委員：マサチューセッツ工科大学から始まったファブラボという3Dプリンタやレーザーカ
ッターなど多様な工作機械を備えた工房が世界中にたくさんあり、各地で得意なもの
を作っている。データをつなげば共通の機械を使って他の地域でも作ることができる。
沼津ならではものづくりをコストをかけずにできるのではないか。

山形出身の奥山 清行という工業デザイナーが好きなのだが、車のデザインをしなが
ら鉄瓶もデザインし、ブランディングしている。同じものづくりに関わる人間として、
沼津で海外展開できるようなものづくりができないかを考えている。

男 性：教育も可能性を持った一つの要素。市では公立のPRが多くなるが、言語課があり、
英語で教育をしている私立学校があることをPRできないのはもどかしく感じる。

嶋田委員：公が担っていたものはいずれ民に回帰すると思っている。寺子屋も民がやっていた。

女 性：まちにお金を落とすのは主婦。リノスクを終えて盛り上がりの先にある孤独を感じた。
一步を踏み出すために仲間を増やす必要を感じ、「ママたちの勝手にまちづくり会議」
を Facebook で立ち上げた。クラウドファンディングの方法や主婦がお金を借りられ

るのかという勉強会を行った。市で行う起業セミナーの一步先の情報を得る機会を作
っていききたい。

高校生が公共空間のワークショップに参加していた。休日はゲームをしているそうだ
が、せっかく豊かな自然があるので、ゲーム以外の楽しみ方ができるまちになってほ
しい。

男 性：アスクラロが J3 に昇格したが、知ってる人は知っているけれど知らない人は知ら
ない。せっかくソフトがあるのだからそれを活かすべきでは。どうしたらウェブが
できるのか。

遠藤委員：阻害要因が公共の側にあるか、リーダーシップをとる人がいないか。

中高生が起業するという発想を抱かないのは教育の問題。部活の押しつけのような文
化があるが、やりたい人だけやればよく、他のことに取り組んでもよいのではないか。
教育が変われば中高生から新しい発想が生まれるのではないか。

周りのせいにするをやめること。物事がちゃんとできている人は、たとえ悪い環
境の下でもできている。

嶋田委員：J2 ファジアーノ岡山のプロモーション戦略は明石卓巳さんがつくった。スタッフに
はマニュアルを配るのではなく、「子どもたちに夢を与える仕事をお願いします」と
だけ伝えた。選手の見目から変わって行って、J2 昇格を果たした。大人たちが主
体的に責任持ってやることが大切。子どもたちは大人の姿を見ている。いろんな選択
肢があることを子どもたちが知ることが大切。

この構想は、これがスタート。何かしらのまとめをするので、協力をお願いしたい。
そしてぜひ遠藤さんに関わっていただくべき。

IV 閉会の挨拶(ぬまづの宝推進課長)